ある徴兵拒否者の歩み

トルストイに導かれて

北御門二郎

著者略歴

きたみかど・じろう 1913年熊本県生まれ。旧制熊本中学から第五高等学校を経て，1933年東京大学英文科入学。その後，退学。現在，熊本県水上村にて農業を営む。著書に小説『假初ならば』，評論集『トルストイとの有縁』（武蔵野書房），訳書に『戦争と平和』『アンナ・カレーニナ』，『復活』（東海大学出版会）『神の国は汝等の衷にあり』（冬樹社）『イワンの馬鹿版画集』（同出版事業会）他多数。

ある徴兵拒否者の歩み
——トルストイに導かれて

一九八三年十月三十一日発行

定価 一四〇〇円

著者 ©北御門二郎

発行者 原田奈翁雄

発行所 株式会社 径（こみち）書房

東京都千代田区三崎町二—一三—五 影山ビル
電話 〇三—二三四—四六〇八（編集）
〇三—二六三—七〇一九（営業）
振替口座 東京一—三二七二六

印刷 明和印刷株式会社
京美印刷株式会社
製本 株式会社 積信堂

0023—0009—2507

ある徴兵拒否者の歩み

トルストイに導かれて

北御門二郎

径書房

ある徴兵拒否者の歩み／目　次

はじめに　5

戦前・戦中篇（1930——'45）

トルストイとの出会い……9
トルストイに導かれた読書の世界……13
軍国主義への怒りと嘆き……25
わが戦争との戦争……40
狼たちの愚行を見つめて……72
公然たる批判と理解者たち……89
敗戦前夜の闇の中で……101

戦後篇（1945——'83）

憲法に思い邪なかるべし……119
原卓也氏との「誤訳論争」のこと……135
豊かなる実りの日日に……145
軍拡の道、訳業の道……160
戦争、暴力、そして信仰……170
反戦と非暴力の泉に汲む……181
おわりに　197

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

＊カバー版画　北御門二郎訳版画集「二老人」より　柴田憲治

＊戦前・戦中篇扉版画　同　池田宗一

＊戦後篇扉版画　同「イワンの馬鹿」より　岩田雅夫

はじめに

今回、径書房の好意によって本書を世に問うに当り、想定された読者の皆さんに一言ごあいさつの言葉を述べたい。

私はこの書の中で、私が青年時代にトルストイにめぐり逢って以来今日までのほぼ半世紀間に、いかなる人生を歩んで来たかを、なるべく正直に、ありのまま皆さんに語りたかった。そのために戦中戦後の私の日記や、折にふれて新聞や雑誌に書いた文章なども引用させていただいた。

正直に、ありのままと言っても、私にはまだ告白する勇気のない罪の思い出が多々あるし、結局一種かっこいい自伝に終ったかもしれないけれど、偏見なしに最後まで読み通して下さる方にとっては、それがまぎれもなく純粋にトルストイに心を寄せつづけた男の、半世紀を超える歴史の、すくなくとも一側面であることを理解していただけると思う。そしてまた、トルストイに心を寄せるということは、同時にイエスに心を寄せることであり、仏陀に、孔子に、老子に、ソクラテスに、カントに、etc・etcに心を寄せるゆえん

であることもご理解いただけると思う。

トルストイは私にとってまさに光だった。そして私にとっての光は、同時に万人にとっての光であることを信ぜざるを得なかった。だから私は、その光についての証言がしたかったのである。

私はトルストイについての評論も解説もできないし、しようとも思わない。しかしながら一人の人間が時空の距(へだた)りを超えてトルストイに心を寄せ、トルストイと共に生きて来た、否、少なくとも生きようと努力して来た略半世紀の歴史を語ることは、より多くトルストイの光についての証言とならないだろうか？

要するに私としては、トルストイに関する教科書を書くことよりも、トルストイを愛してもらえるための書物が書きたかった。それを通じてなるべく多くの人々と、トルストイへの愛を分ち合いたかった。そのことこそまさしく深奥からのトルストイの紹介であり、トルストイへの勧誘であると私には思われたのである。そうした自分の意図が、今この書によってどれほど果されたか、謹んでここに、読者の皆さんの審判にゆだねる次第である。

戦前・戦中篇　1930——'45

トルストイとの出会い

私とトルストイとの出会いは、一九三〇年（昭和五年）、旧制高校一年生、十七歳の時だった。ある日友人の家を訪ねて、ふとそこにあった『人は何で生きるか』という彼の民話を手にして読み始めたが、たちまちその内容にぐんぐん惹きつけられていった。その時私の胸中には、初めて本当の書物にぶつかったという感慨、人生の第一義的なものへの開眼を促されたという感慨があった。

『人は何で生きるか』に刺激された私は、こんどは同じくその友人の家にあった『イワンの馬鹿』をひもとくことになった。そしてその中の絶対平和の思想が、私に烈しいショックを与えた。その中でトルストイの説く所が、小学校以来十数年にわたって受けて来た人の上に人を置き、他民族への敵愾心とその殺戮を讃美する学校教育の内容とあまりにもかけへだたっていたからである。一体トルストイが嘘をついているのだろうか？　それとも学校の先生方が永年私

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

を欺きつづけて来たのだろうか？と自問せざるを得なかった。こうして徐々にその点に関しての学校教育への不信が強まるにつれ、ますます自分がトルストイから離れられなくなるのを感じるようになった。そこで、当時トルストイ生誕百年を記念して岩波書店が出した全集が古本屋に出まわっているのを探して、次から次と読んでいったのである。しかし自分が一体誰の翻訳で読んでいるのかについては、その頃はまだ全然無関心だった。それでも要するにその頃を、トルストイとの最初の出会いと言っていいであろう。

『アンナ・カレーニナ』を読んだのは、たしか高校二年の終り頃だったと思う。これまたある日もう一人の友人の家を訪ねたら、彼がこの大作を手にして悠々と読み耽っているところにぶつかった。何だか先を越されたような気がして、わが家へ帰るや早速私も、岩波版中村白葉訳の『アンナ・カレーニナ』を読み始めた。この作品はたちまち私に筆舌に尽し難い感動を与え、私を読書三昧の世界へ拉し去った。そして第五編二十九章の、アンナが息子のセリョージャに逢いに行くくだりまで読んだ時、私は、どうでもこの作品を原典で、トルストイが書いたままの文章で読むためにロシヤ語を勉強しようと決意した。この作品が与える感動が強ければ強いだけ、漱石の言葉を藉りれば、それが私に「還元的感化」（朝日講演集「文藝の哲学的基礎」参照）を与えれば与えるだけ、どうしてもより一層純粋な形でこの名作に接したいという想いを抑えることが出来なかった。ずっと後で私の仄聞した所では、正宗白鳥は当時の青年達に向かって、

君らもくだらないものばかり読まないで、ロシヤ語を勉強してトルストイでも読んだらどうだ、といったようなことを言っているそうだが、どうもその後、白鳥の忠言に従って、トルストイを読むためにロシヤ語を勉強したという人物が現れた形跡はあまりない。ロシヤ語を勉強したからトルストイを読んだ人達はいたであろうし、またトルストイを翻訳した人はたしかにいたけれども、私の場合正宗白鳥の忠告など全然あずかり知らぬまま、当面ひたすら『アンナ・カレーニナ』を、そして結局はトルストイの全作品を読むためのロシヤ語学習という志を立てたのである。あれ以来まさに半世紀、私のロシヤ語は今日も依然として、ひたすらトルストイを読むための、そしてまた事情あって同時にトルストイを翻訳するためのロシヤ語なのである。この、ロシヤ語学習を固く決意した時を、私は自分とトルストイとの第二の出会いと考えたい。『戦争と平和』を、これまた翻訳で読んだのは、一九三三年（昭和八年）、東大英文科入学直後のことだった。この幻の超大作のことは、旧制中学時代からその名を聞かされていたけれど、『アンナ・カレーニナ』の感動があまりにも大きかったため、なんぼトルストイでもあんな風な傑作をそうざらに書けるはずはない、といった気がして『戦争と平和』への期待はあまり大きくなかったのであるが、案に相違して『アンナ・カレーニナ』にも劣らぬ感動を覚え、自分がトルストイのあらゆる作品に感動するよう運命づけられているのを知り、これまた何が何でも原書で読もうと決意したのである。これはいわば、トルストイと私との第三の出会いであっ

た。

こうしてトルストイとの出会いを果した私は、大学入学後も、当時の市河英語学や斉藤英文学の砂を嚙むような味気なさもあって、英文科生としての勉強はそっちのけで、辞書を片手にロシヤ語でトルストイを読むことに専念した。さきに述べたように、最初に『アンナ・カレーニナ』が私にロシヤ語学習の決意を固めさせたという事情のため、まず手初めに選んだテキストは『アンナ・カレーニナ』だった。東大正門前の郁文堂でビリューコフ版トルストイ全集を手に入れた私は、当時東京外国語学校から東大に出講されていた八杉貞利先生の講義に出席して、当時のソビエト作家ウェレサーエフのものをテキストに学習し、下宿に帰ればすぐに『アンナ・カレーニナ』を開くといった調子だった。ある日ピッカリングという英人講師の講義に出席している時、例によって教室に『アンナ・カレーニナ』を持ち込んで読んでいたら、突然英語で何か質問されて、あわてて英語の代りにロシヤ語で何かを口走ったりしたことを思い出す。

こうしてトルストイとの出会いは、私をして学校教育にそっぽを向かせ、官学が私に与えようとするものを拒否して、自らの欲するものを自ら選ぶ道を私に択ばせることになった。その結果私の人生は大きく変り、ようやくわが子を赤門に入学させて、末は博士か大臣かを夢見ていたであろう母の期待を大きく裏切ることになったが、ある意味で私に精神的転機をもたらしたその辺の経緯について次に書いてみたいと思う。

トルストイに導かれた読書の世界

トルストイとの出会いによって、何よりもまず私は〈読書の世界〉へ導き入れられた。もともと本を読むことの好きな私は、小学校の頃から教科書だけでは物足りなくて、当時盛んに発行されていた立川文庫によって、猿飛佐助だ、霧隠才蔵だ、三好清海入道だといったものを、血湧き肉躍る気持で読んだりしていたし、熊本中学時代、徳富蘆花の『思ひ出の記』を読んだり、漱石のものをかじってみたりしたことはあったが、それはまだ本格的な読書とは言えなかった。やっぱりさきに述べた通り、『人は何で生きるか』との出会いが私の真の読書への第一歩だったと思う。つまり、読書とは単に面白おかしいものではなく、人生における厳粛な一大事であることを知ったわけである。

話は前後するけれども、こうしてトルストイによって導き入れられた読書の世界の中でめぐり会った一冊の本に『論語』があるが、やがてそれは私の座右の書となっていった。そしてあ

る日ふと、それまで何気なく読み過していた「我十有五にして学に志し」という言葉をわが身に当てはめてみて、自分は一体いつ学に志したかを反省し、『人は何で生きるか』にめぐり会った時がそうだったのだ、つまり、孔子に遅るること二年、我十有七にして学に志したのだ、と思ったことであった。

トルストイによって読書の世界に導かれた私は、何よりもまずトルストイの作品を最初翻訳で次々と読み、やがて上述のように翻訳では物足りなくてロシヤ語の学習へとエスカレートして行ったが、まだまだひたすら翻訳で夢中に読み耽っていた高校二年の夏休み、当時湯前村といっていた郷里のわが家に一人の牧師さんが訪ねて来た。私の母はギリシャ正教の信者で、この私も数え年五歳の頃人吉の教会で洗礼を受けさせられたが、そうしたいわゆるクリスチャンの家庭と見て、宗教書を売りつけにその牧師さんは来たらしかった。その時母は四方山話の中で、自分の次男が最近しきりにトルストイに読み耽っていることを牧師さんに話したらしく、牧師さんが、その坊ちゃんとちょっとお話したいと言い出して、とうとう母と三人でテーブルを囲むことになった。その時いろんな話が出たと思うが、覚えているのは唯一つ、その牧師さんの「トルストイを読まれるのは結構ですが、何よりもまず聖書を読まねば駄目ではないですか？　それがトルストイを理解するための前提条件と思いますがねえ」という言葉だった。実は私自身そろそろ、その事を感じかけていたし、残念ながらまだそれまで一度も聖書を読んだこ

とがなかったので、然らばお言葉に従って読んでみようということになり、間もなくギリシャ正教会訳の聖書によって、「マタイによる福音書」(マタイ伝)の第一章から読み始めることになった。

これも後になってからのことであるが、その後私が漱石に読み耽り、漱石が、真に西洋文学を理解するためには、ぜひ聖書やギリシャ・ローマ神話を読まねばならないと言っているのを知って、全くそうだと感じ、あらためてあの時の牧師さんの忠告に感謝の念を抱いたことであった。

ところで「マタイ伝」第一章であるが、読んでみると、ただ人の名前がずらりと並んでいて一向面白くない。辛抱して読み進んでいっても、第四章の終りまで何らの感動も覚えない。そしてとうとう第五章、あの有名な山上の垂訓の個所にたどりついたが、たどりついた瞬間の感想を私は何と表現したらいいであろう？　まさに青天の霹靂と言おうか、眼から鱗が落ちたと言おうか、その第五章は決定的に私と聖書とを結びつけてしまったのである。

これまた後になって、講演などに招かれて私の読書遍歴を語る場合、私は聖書とのめぐり会いを、まだ四十代の頃富士五湖の一つ山中湖にスケートに行った時のことを引き合いに出して語った。甲府から三坂峠へ向かって、タイヤにチェーンを巻いたバスで登って行くと、峠はトンネルになっていて、トンネルを出るとそこはまさに雪国、真正面に深々と雪をいただく富士山が聳えており、眼下には河口湖が紺碧の色を流している。はっと息をのむその光景は、私がそれまで接して来た絶景中の最大の絶景だった。それがひとまとめになってぱっと眼の中に飛び

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo